

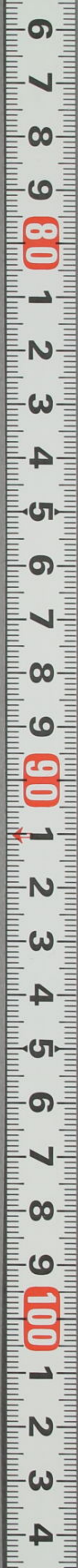


真 艸

和漢朗詠集

作者入  
上

~ 7  
4398  
1





4398  
7  
4398

此訓詁集ハ 尊圓法親王御末後の論中と云て本文と換へ  
致書小楷書として更に本文の待とあり 其州二體の字形と  
噴し初名の傳と云し且侍飲の作者と詳ふる事あり 其本なり

真州  
頭書

# 和漢朗詠集

切し加ふ附

## 京撰書肆

稱觥堂  
鬻書館



此書ハ一條院の御宇  
四條大納言公任卿に  
御作也和とい我大御  
國の号漢ハ唐土の稱  
朗ハ清明透徹の義詠  
ハ詩歌に詠吟れ事也  
我國ハ思と歌と詠と  
唐土人ハ詩と賦とて  
志と述詩と和哥と名  
ハ異るれども義ハ同  
ト此集ハ和漢賢才の  
人々の絶妙清明たる  
詩歌と選集給へる故  
和漢朗詠集といつり  
その所以に給へる詩  
歌とも殊と面白き秀

### 和漢朗詠集卷上目録

#### 春

立春 早春 暮春 春興 春夜

子曰 宵言

二月 暮春 同二月 雪

處 面 梅竹 柳

死 夢 蠟燭 秋冬 藤

夏





逸のさるが故往古  
より催馬樂東哥まじ  
の如く此詩哥二曲節  
と付て歌謡と一人々  
りてあそび傳へて也  
今に至りて童子素讀  
此入門とせり事都哥  
とて習くせり  
され故又世間流  
布は本數板あはれども  
寸毫文字の誤多く  
其讀法もさあぐて  
一様なれば其是  
非と辨へ難きに至れ  
此本の尊圓親王御真  
跡の證本とて本文

更衣 首夏 夏夜 端午  
納涼 晚夏 花橋 蓮  
郭公 蟬 螢 扇  
秋  
立秋 早旭 七夕 秋興  
秋晚 秋夜 八月十五夜  
九月九日 附 九月冬 女御  
萩 菊 橙 萩  
萩

と撰一頭書二楷書に  
て夫々の詩と書頭一  
真州二體の字形と論  
さしめ且右之證本と  
付たる訓點は隨て讀  
法と平らふて記す  
捨つみ付讀等ハ本書  
の間一々か交書す  
助字ハ○と印とハ讀  
ざる字也再讀の字ハ  
□と印とハ上層の讀  
法と本文の文字と上  
下顛倒せりハ歸讀の  
字也異ことまへ  
野曲歌謡と異成ハ本  
文の傍一序りて而記

紅葉 雁 霜 霧 梅  
冬  
初冬 冬夜 歲暮 爐火  
霜 雪 氷 霰  
弘名



四季之部

春

立春

吹と逐潛に開く芳菲  
之候を待不春を迎て  
乍變ハ將雨露之恩  
と希と將

池の凍の東頭ハ風度  
て解憲の梅の北面ハ  
雪封トて寒

柳氣力無く條先動  
池は浪の文有て氷盡  
開

今日知不誰ハ計會セ  
春風春水一時不来

夜残更小向くして寒  
磬盡春香火を生トて  
曉露燃

早春

水田地消て蘆錐短  
春枝條入て柳眼低

先和風をくて消息と  
報せ遣續て啼鳥と

て来由を説教  
東岸西岸之柳遅速同  
ら不南枝北枝之梅

開落已異  
紫塵の蟻蔵人手と奉  
碧玉の寒さ蘆錐囊と

春

立春

吹と逐潛に開く芳菲  
之候を待不春を迎て  
乍變ハ將雨露之恩  
と希と將

池の凍の東頭ハ風度  
て解憲の梅の北面ハ  
雪封トて寒

柳氣力無く條先動  
池は浪の文有て氷盡  
開

今日知不誰ハ計會セ  
春風春水一時不来

夜残更小向くして寒  
磬盡春香火を生トて  
曉露燃

早春

水田地消て蘆錐短  
春枝條入て柳眼低

先和風をくて消息と  
報せ遣續て啼鳥と

て来由を説教  
東岸西岸之柳遅速同  
ら不南枝北枝之梅

開落已異  
紫塵の蟻蔵人手と奉  
碧玉の寒さ蘆錐囊と



脆も  
氣齊てハ風新柳の髪  
と梳水消てハ波舊昔  
の鬢と洗  
庭ハ氣色と増ハ晴沙  
綠カク林小容輝と變  
ぢれば宿雪紅あり

春興

花の下にて歸ること  
と忘ろハ美景ハ因  
てあり樽此前ハ酔と  
勸ハ是春の風  
野草芳菲より紅錦の  
地遊絲繚乱たり碧羅  
の天

歌酒ハ家花ハ處處  
空上陽の春と管領十  
ること莫  
山桃復野桃日紅錦之  
幅ハ曝門柳復岸柳風  
麴塵之絲と宛  
野ハ著てハ展敷ハ紅  
錦繡天ハ當てハ遊織  
と碧羅綾  
林中の花錦ハ時ハ開  
落ハ天外の遊絲ハ或  
ハ有無たり  
笙歌の夜の月家家の  
思詩酒の春の風處處  
の情

春夜

春夜

氣齊風梳新柳髮氷消波洗高き處  
春増氣色と増ハ晴沙  
綠カク林小容輝と變  
ぢれば宿雪紅あり

志  
紀納言

山風よとくふあしのしらごとく  
しらゆる宿やまねたしんさ

志  
正化

春興

花の下にて歸ること  
と忘ろハ美景ハ因  
てあり樽此前ハ酔と  
勸ハ是春の風  
野草芳菲より紅錦の  
地遊絲繚乱たり碧羅  
の天

劉禹錫

歌酒ハ家花ハ處處  
空上陽の春と管領十  
ること莫  
山桃復野桃日紅錦之  
幅ハ曝門柳復岸柳風  
麴塵之絲と宛  
野ハ著てハ展敷ハ紅  
錦繡天ハ當てハ遊織  
と碧羅綾  
林中の花錦ハ時ハ開  
落ハ天外の遊絲ハ或  
ハ有無たり  
笙歌の夜の月家家の  
思詩酒の春の風處處  
の情

笙歌の夜の月家家の  
思詩酒の春の風處處  
の情

春夜

而夜の天を人ハいふありや梅をててさす事ハ  
まはるはれとてさす花をうらふけきありハれ  
忠奉



燭を背て共々隣深夜  
の月花と踏ハ同惜少  
年の春

子曰 付若菜

松樹に倚く以腰を摩  
バ風霜之犯難く  
菜羹と和而口に啜  
れハ氣味之克調らん  
松根小倚而腰を摩ハ  
千年之翠手に満る梅  
花と折て頭ニ排ハニ  
月之雪衣に落

背燭共懐深夜月踏ハ同惜少

其の夜に在るハやうやう梅の星  
いろくそえくね青やうかた

子曰 付若菜

倚松樹以摩腰風霜之犯難

菜羹と和而口に啜れハ氣味之克調

松根小倚而腰を摩ハ千年之翠手に満る梅

花と折て頭ニ排ハニ月之雪衣に落

子曰 付若菜  
いろくそえくね青やうかた

白

菅丞相

若菜

野中小菜と若で世事  
之と蕙心小推爐下小  
羹と和して俗人之と  
黄指に属と

三月三日 付桃花

春来てハ遍是桃花の  
水たれハ仙源と  
辨不何の處と尋ん

若菜

野の目と心と若菜の心と世事の心と  
春の目と心と若菜の心と世事の心と

野中小菜と若で世事

之と蕙心小推爐下小

羹と和して俗人之と  
黄指に属と

三月三日 付桃花

春来てハ遍是桃花の  
水たれハ仙源と  
辨不何の處と尋ん

王維



春之暮月之三朝  
花千醉り桃李盛  
る也我君一日之澤  
機之餘曲水逆り  
雖遺塵絶たりと雖  
の字と書而地勢と知  
魏文と書以風流と  
計蓋志之所謹て小  
序と獻と云  
烟霞の遠近同戸  
應桃李の浅深勸孟  
たり  
水巴の字と成初三  
日源周年より起て後  
幾霜や  
石に凝れて遅來ハ心

春之暮月之三朝  
花千醉り桃李盛  
る也我君一日之澤  
機之餘曲水逆り  
雖遺塵絶たりと雖  
の字と書而地勢と知  
魏文と書以風流と  
計蓋志之所謹て小  
序と獻と云  
烟霞の遠近同戸  
應桃李の浅深勸孟  
たり  
水巴の字と成初三  
日源周年より起て後  
幾霜や  
石に凝れて遅來ハ心

驪<sup>り</sup>と待流<sup>り</sup>と幸<sup>て</sup>と過<sup>り</sup>

札<sup>ハ</sup>手光<sup>遮</sup>

夜の雨偷<sup>ニ</sup>濕<sup>テ</sup>曾<sup>レ</sup>波<sup>ノ</sup>之<sup>レ</sup>  
眼新<sup>ニ</sup>嬌<sup>リ</sup>曉<sup>ノ</sup>風<sup>ノ</sup>  
緩吹<sup>テ</sup>不<sup>レ</sup>言<sup>フ</sup>の唇先<sup>ニ</sup>咲<sup>ク</sup>

暮春

水と拂柳花ハ千萬點  
樓と隔鶯舌ハ兩三聲  
翅と低沙鷗ハ湖の落  
曉絲と亂野馬ハ草の

深春

人更<sup>ニ</sup>少<sup>シ</sup>時<sup>ヲ</sup>無<sup>ク</sup>須<sup>レ</sup>惜<sup>ム</sup>頻<sup>ニ</sup>年<sup>ヲ</sup>  
常<sup>ニ</sup>春<sup>ヲ</sup>不<sup>レ</sup>酒<sup>ト</sup>と空<sup>ニ</sup>  
すくも莫<sup>ク</sup>

劉白若今日好<sup>ク</sup>なりと  
と知<sup>ル</sup>ト<sup>ク</sup>バ此處<sup>ト</sup>

真草和漢朗詠集

云々

三子とせにまふて入桃のこと

暮春

水と拂柳花ハ千萬點  
樓と隔鶯舌ハ兩三聲  
翅と低沙鷗ハ湖の落  
曉絲と亂野馬ハ草の  
人更<sup>ニ</sup>少<sup>シ</sup>時<sup>ヲ</sup>無<sup>ク</sup>須<sup>レ</sup>惜<sup>ム</sup>頻<sup>ニ</sup>年<sup>ヲ</sup>  
常<sup>ニ</sup>春<sup>ヲ</sup>不<sup>レ</sup>酒<sup>ト</sup>と空<sup>ニ</sup>  
すくも莫<sup>ク</sup>

劉白若今日好<sup>ク</sup>なりと  
と知<sup>ル</sup>ト<sup>ク</sup>バ此處<sup>ト</sup>

真草和漢朗詠集

紀納言

躬直

元稹

菅

小野篁

其風



ハ言應何とハ言不  
三月盡

春を留るゝ春駐不春  
歸て人寂寞たり風と  
厭ゝ風定まら不風起  
て花蕭索たり

竹院君開て永日  
と銷し花亭に我酔て  
残春を送  
惆悵春歸留てを得不

紫藤花下漸黄昏たり  
春と送る舟車と動こ  
と瓜用不唯殘鶯と落  
花與る別

若韶光使我意知便  
今宵旅宿詩の家在

春留ゝ開城固と用不  
花落て風と隨鳥雲入

閏三月  
今年閏ハ春三月又在  
刺金陵一月の花と見  
谿歸歌鶯更孤雲之路

蝶還一月之花と翻翻  
花ハ根と歸ると悔れ  
とも悔と益無鳥ハ谷  
入る瓜期とれども  
定て期と延

真道口集

三月を

春を留るゝ春駐不春  
歸て人寂寞たり風と  
厭ゝ風定まら不風起  
て花蕭索たり

竹院君開て永日  
と銷し花亭に我酔て  
残春を送  
惆悵春歸留てを得不

紫藤花下漸黄昏たり  
春と送る舟車と動こ  
と瓜用不唯殘鶯と落  
花與る別

若韶光使我意知便  
今宵旅宿詩の家在

春留ゝ開城固と用不  
花落て風と隨鳥雲入

閏三月  
今年閏ハ春三月又在  
刺金陵一月の花と見  
谿歸歌鶯更孤雲之路

蝶還一月之花と翻翻  
花ハ根と歸ると悔れ  
とも悔と益無鳥ハ谷  
入る瓜期とれども  
定て期と延

真道口集



鷺 鷺既鳴忠臣且待

鷺未出未遺賢谷在

誰家の碧樹より鷺鳴

而羅幕猶垂幾處花堂

より夢覺而珠簾未卷

霧咽山鷺啼こと尚少

砂穿蘆笋ハ葉纒ハ分

莖頭酒有て鷺客と呼

水面塵無して風池洗

鷺此聲ハ誘引セられ

て花下來草色拘留セ

られて水邊ハ坐と

同類ハ相求小感て離

鴻去雁之春の轉ハ應

異氣と會而終ハ混ハ

龍吟魚躍之曉啼ハ伴

燕姬之袖暫收て繚乱

と拍舊拍ハ猜之周郎

之替類ハ動て間關と

新路ハ如今宿雪と穿

舊巢ハ後の為ハ春の

霞

鷺

鷺既鳴忠臣且待 賈島

鷺未出未遺賢谷在 謝觀

誰家の碧樹より鷺鳴 元鎮

而羅幕猶垂幾處花堂

より夢覺而珠簾未卷

霧咽山鷺啼こと尚少

砂穿蘆笋ハ葉纒ハ分

莖頭酒有て鷺客と呼

水面塵無して風池洗

鷺此聲ハ誘引セられ

て花下來草色拘留セ

られて水邊ハ坐と

同類ハ相求小感て離

鴻去雁之春の轉ハ應

異氣と會而終ハ混ハ

龍吟魚躍之曉啼ハ伴

燕姬之袖暫收て繚乱

と拍舊拍ハ猜之周郎

霞



霞の光ハ曙て後火よ  
来て嬾と烟と似たり  
沙と鑽草ハ只三分許  
樹と踏霞ハ纔と半段  
餘

兩

或ハ花の下ニ垂とし  
て潜ニ墨子ガ之悲と  
増時ニ鬢の間ニ舞て  
暗ニ潘郎ガ之思と動  
長樂の鐘の聲ハ花の  
外ニ盡ぬ龍池の柳の  
色ハ雨の中ニ深  
養得てハ自花の父母

為洗来てハ寧藥の君  
臣と辨んや  
花の新ニ開日初陽潤  
鳥の老て歸時薄暮陰  
斜脚ハ暖風の先扇處  
暗聲朝日の未晴困程

梅

白片の落梅ハ潤水ニ  
浮黄梢の新柳ハ城牆  
より出たり  
梅花ハ雪と帯て琴上飛  
柳色ハ烟和し酒中入  
漸薰臘雪新封する裏  
偷紙春風木扇困先

あ光の曙後火よ  
来て嬾と烟と似たり

沙と鑽草ハ只三分許  
樹と踏霞ハ纔と半段

さのすそ年ハ春日の山ニくまきりり  
まきりりやいほみりやいほみりやいほみり

朝霞ハ春風木扇困先

赤人

五

或ハ花の下ニ垂とし  
て潜ニ墨子ガ之悲と  
増時ニ鬢の間ニ舞て  
暗ニ潘郎ガ之思と動  
長樂の鐘の聲ハ花の  
外ニ盡ぬ龍池の柳の  
色ハ雨の中ニ深  
養得てハ自花の父母

為洗来てハ寧藥の君  
臣と辨んや  
花の新ニ開日初陽潤  
鳥の老て歸時薄暮陰  
斜脚ハ暖風の先扇處  
暗聲朝日の未晴困程

梅  
白片の落梅ハ潤水ニ  
浮黄梢の新柳ハ城牆  
より出たり

梅花ハ雪と帯て琴上飛  
柳色ハ烟和し酒中入  
漸薰臘雪新封する裏  
偷紙春風木扇困先

梅

白片の落梅ハ潤水ニ  
浮黄梢の新柳ハ城牆  
より出たり  
梅花ハ雪と帯て琴上飛  
柳色ハ烟和し酒中入  
漸薰臘雪新封する裏  
偷紙春風木扇困先



五嶺蒼蒼として雲往  
來但憐大廈萬株の梅  
誰言春色東從到とい  
露暖して南枝花始開  
青絲縷出陶門の柳白  
玉裝成度嶺の梅

紅梅  
梅ハ雞舌と含て紅氣  
と兼たり江ハ瓊花と  
弄して碧文と帯たり  
淺紅輝娟たり仙方之  
雪色と媚濃香芬郁た  
リ妓鑪の烟薫と讓

色有て分易殘雪の底  
情無して辨難夕陽中  
仙白風生て空雪と欺  
野爐火暖して未  
烟と揚塵

柳  
林鴛ハ何の處より筆  
の柱と吟牆柳ハ誰家  
とク麴塵と曝  
漸他の騎馬は客と拂  
と欲をんハ未多樓上  
上人と遊得困  
巫女廟の花ハ粉似紅  
昭君村の柳ハ眉於翠  
○一説紅して粉似たり

五嶺蒼蒼として雲往來但憐大廈萬株の梅

誰言春色東從到とい露暖して南枝花始開

青絲縷出陶門の柳白玉裝成度嶺の梅

梅ハ雞舌と含て紅氣と兼たり江ハ瓊花と弄して碧文と帯たり

紅梅

淺紅輝娟たり仙方之雪色と媚濃香芬郁たり

リ妓鑪の烟薫と讓

漁之煙讓

色有て分易殘雪の底情無して辨難夕陽中

仙白風生て空雪と欺野爐火暖して未烟と揚塵

柳

林鴛ハ何の處より筆の柱と吟牆柳ハ誰家とク麴塵と曝

漸他の騎馬は客と拂と欲をんハ未多樓上上人と遊得困

巫女廟の花ハ粉似紅昭君村の柳ハ眉於翠

菅三品

右次

後江相公

阿蘇廣庭

赤人

羽直

元真

橋正道

前中書王兼明

紀齊名

友則

花山院

白



誠知ぬ老去て風情  
此少こと瓜此と見て  
争う一句の詩無らん  
大庾嶺之梅ハ早落誰  
ら紛粧と問ん匡廬山  
之杏ハ未開未豈紅艶  
と赴置  
雲紅鏡と擎扶桑の日  
春黄珠と媚柳の風  
替宅晴と迎て庭月暗  
陸地日と逐て水烟深  
潭ハ月泛で枝と交  
る桂岸口ハ風来て葉  
混るる蘋

淑知む老風情少見  
大庾嶺之梅早落誰  
之杏未開豈紅艶  
雲紅鏡と擎扶桑の日  
替宅晴と迎て庭月暗  
潭ハ月泛で枝と交  
る桂岸口ハ風来て葉  
混るる蘋

江相公

田達音

菅三品

後中皇皇具平

菅三品

菅三品

菅三品

菅三品

花月夜

花上月明  
軒九陌之塵と馳旅空  
山ハ叫て斜月千巖之  
路と瑩  
池の色ハ溶溶とて  
藍水と深花光ハ焰  
焰とて火春と燒  
遠ハ人家と見て花  
れハ便入貴賤と親疎  
與と論ぜ不  
日ハ瑩風に瑩高低千  
顆万顆の玉枝と深浪  
と深表裏一入再入之紅  
誰ハ謂水ハ心無と濃  
艶ハ臨て波色と變

花上月明  
軒九陌之塵と馳旅空  
山ハ叫て斜月千巖之  
路と瑩  
池の色ハ溶溶とて  
藍水と深花光ハ焰  
焰とて火春と燒  
遠ハ人家と見て花  
れハ便入貴賤と親疎  
與と論ぜ不  
日ハ瑩風に瑩高低千  
顆万顆の玉枝と深浪  
と深表裏一入再入之紅  
誰ハ謂水ハ心無と濃  
艶ハ臨て波色と變

張讀

菅三品

菅三品





誰謂一花語不と輕漾  
激して影唇と動を  
之と水と謂と欲とバ  
則漢女粉と施之鏡清  
瑩たり之と花と謂と  
欲とバ亦蜀人文と濯  
之錦榮爛たり  
織ことハ何の糸自唯  
暮の雨裁とハ定とる  
積無春風と任と  
花飛で錦の如幾濃粧  
織者ハ春風未箱壘困  
始識春風の機上と巧  
かるこ瓜唯色と織の  
こ非芬芳と織り  
眼ハ蜀郡と貧裁殘錦

花を花波濼濼号新動唇  
欲謂之も則漢女粉施之鏡清瑩  
謂之花も蜀人文濯之錦榮爛  
織自何絲唯も蜀人濯之錦榮爛  
不我如錦華洗粧織者も蜀人濯之錦  
始識春風の機上と巧  
眼貧蜀郡裁殘錦  
世の中はたそ移のまう其まのむハのけり  
我者の花見ぐにけり人ハうたんのを  
業平  
源英明  
源相規  
順  
菅三品

耳へ崇城と倦調盡  
落花

落花語不空樹と辞す  
流水心無して自池入  
朝も落花と踏と相  
伴て出暮も飛鳥と  
随て一時と歸  
春の花へ面も酣暢  
之筵に闖入と曉の鶯  
ハ聲聲と講誦之座と  
豫參才異曉作晚  
落花狼籍たり風狂  
て後啼鳥龍鐘と雨  
の打時  
閑と誰と鳳の翔ハ檻  
と憑て舞樓と下娃の

落花  
足てのこや人のかん  
落花  
為る不我如錦華洗粧織者も蜀人濯之錦  
始識春風の機上と巧  
眼貧蜀郡裁殘錦  
世の中はたそ移のまう其まのむハのけり  
我者の花見ぐにけり人ハうたんのを  
業平  
源英明  
源相規  
順  
菅三品







生衣ハ家人と待て着  
いと欲す宿願ハ當邑  
老と招て酣る圖

首夏

甕の頭ハ竹葉ハ春と  
經て熟ハ階の底ハ菖  
微ハ夏又入て開  
苔石面ハ生して輕衣  
短ハ荷ハ池心より出  
て小蓋疎さる

夏夜

風枯木と吹ハ晴天の  
雨月平沙と照セバ夏  
の夜の霜

生衣招て家人と待て着  
いと欲す宿願ハ當邑  
老と招て酣る圖

花の交にそあハ秋のさきれば  
ころもぐえうきさうにもまうれ

首夏

甕頭竹葉は春と  
経て熟は階の底は菖  
微は夏又入て開  
苔石面は生して輕衣  
短は荷は池心より出  
て小蓋疎さる

苔石面ハ生して輕衣  
短ハ荷ハ池心より出  
て小蓋疎さる

わう者のわきハひやまを  
たのむにまうりて足ゆわの

夏夜

風枯木と吹ハ晴天の  
雨月平沙と照セバ夏  
の夜の霜

風竹ハ生夜意の間  
臥す月松と照時ハ  
臺の上ハ行

空夜窓閑さハ螢度て  
後深更轉白ハ月ハ明  
さら初

端午

時有てハ又當て身と  
危して注意無して故  
園脚ハ任て行

納涼ナク又

風竹ハ生夜意の間  
臥す月松と照時ハ  
臺の上ハ行

空夜窓閑さハ螢度て  
後深更轉白ハ月ハ明  
さら初

夏の夜をねにぬねといひ  
夏の夜をねにぬねといひ

端午

時有てハ又當て身と  
危して注意無して故  
園脚ハ任て行

あまのこころにのひら  
あまのこころにのひら

納涼



青苔の地上に殘雨を  
 消し緑樹の陰の前  
 晩涼と逢  
 露草清榮くして夜と  
 迎て滑る風襟蕭灑  
 として秋先て涼  
 是禪房に熱の到こと  
 無し不但能心静を  
 とい即身も涼  
 班婕妤が團雪之扇岸  
 風に代り長忘燕の昭  
 王招涼之珠沙月は當  
 自得たり  
 卧てハ新圖臨水の障  
 と見行てハ古集納涼  
 の詩と吟ず

青苔の地上に殘雨を消し  
 緑樹の陰の前  
 晩涼と逢  
 露草清榮くして夜と  
 迎て滑る風襟蕭灑  
 として秋先て涼  
 是禪房に熱の到こと  
 無し不但能心静を  
 とい即身も涼  
 班婕妤が團雪之扇岸  
 風に代り長忘燕の昭  
 王招涼之珠沙月は當  
 自得たり  
 卧てハ新圖臨水の障  
 と見行てハ古集納涼  
 の詩と吟ず

池冷して水は三伏の  
 夏無松高して風は一  
 聲の秋有  
 晩夏  
 竹亭陰合て偏に夏  
 宜水檻風涼して秋と  
 待不  
 花橋  
 盧橋子低て山雨重拈  
 欄葉戰て水風涼  
 枝にハ金鈴と繫春雨  
 後花ハ紫麝と薫す  
 颯風の程  
 蓮

池冷して水は三伏の夏無松高して風は一  
 聲の秋有  
 晩夏  
 竹亭陰合て偏に夏宜水檻風涼して秋と  
 待不  
 花橋  
 盧橋子低て山雨重拈欄葉戰て水風涼  
 枝にハ金鈴と繫春雨後花ハ紫麝と薫す  
 颯風の程蓮

蓮

蓮



風荷の老葉ハ蕭條と  
して緑より水蓼ハ残  
花ハ寂寞として紅  
葉展てハ影翻碯<sub>二</sub>當  
月花開てハ香散簾<sub>二</sub>  
入風  
烟翠扇と開清風ハ曉  
水紅衣と泛白露の秋  
岸竹枝低る鳥の宿應  
潭荷葉の動是魚遊らん  
何<sub>二</sub>緑<sub>一</sub>更<sub>二</sub>吳山<sub>一</sub>  
曲と直む便是吾君比  
座下の花  
經<sub>二</sub>ハ題目為佛<sub>一</sub>ハ  
眼為知ぬ汝が花の中  
善根と植ことと

蓮

風荷の老葉ハ蕭條と  
して緑より水蓼ハ残  
花ハ寂寞として紅  
葉展てハ影翻碯<sub>二</sub>當  
月花開てハ香散簾<sub>二</sub>  
入風  
烟翠扇と開清風ハ曉  
水紅衣と泛白露の秋  
岸竹枝低る鳥の宿應  
潭荷葉の動是魚遊らん  
何<sub>二</sub>緑<sub>一</sub>更<sub>二</sub>吳山<sub>一</sub>  
曲と直む便是吾君比  
座下の花  
經<sub>二</sub>ハ題目為佛<sub>一</sub>ハ  
眼為知ぬ汝が花の中  
善根と植ことと

郭公  
一聲の山鳥曙雲の外  
萬點れ水螢秋草乃中

螢  
螢火乱飛て秋已<sub>二</sub>近  
辰星早没て夜初て長  
葦葭水暗して螢夜と  
知揚柳風高して雁<sub>一</sub>  
秋と迷  
明明として仍在誰<sub>一</sub>  
月光と屋上<sub>二</sub>追人<sub>一</sub>皓  
皓として消不豈雪片  
と床頭積人<sub>一</sub>圓

郭公

一聲の山鳥曙雲の外  
萬點れ水螢秋草乃中  
郭公  
螢  
螢火乱飛て秋已<sub>二</sub>近  
辰星早没て夜初て長  
葦葭水暗して螢夜と  
知揚柳風高して雁<sub>一</sub>  
秋と迷  
明明として仍在誰<sub>一</sub>  
月光と屋上<sub>二</sub>追人<sub>一</sub>皓  
皓として消不豈雪片  
と床頭積人<sub>一</sub>圓



過らと疑海賦の篇に  
中より流る宿るに  
似たり

蟬

遲遲⑤春の日は玉の  
楚暖⑥⑦温泉溢爛爛  
⑧秋の風は山に蟬鳴  
⑨官樹紅あり  
千峯の鳥は路に梅雨  
と念五月の蟬の聲は  
麥秋と送  
鳥緑無下て秦楚詩  
官秋あり

猶言所於本頭

山經卷裏疑海賦篇中蟬流

赤人

蟬

遲々春の日は楚暖  
秋風山蟬鳴あり

秋風山蟬鳴あり

鳥下緑無下て秦楚詩

官秋あり

細納言

橋直轄

許軍

李喜祐

白

今年へ例より異  
腸先断是蟬悲の  
不客の意も悲う  
歳去歳来て聴ども  
不言こと莫秋の後  
遂に空と為と

扇

盛夏にも消不雪終年  
も盡く無風秋と  
引て手裏に生十月と  
藏して懐中に入  
期せ不夜漏の初て分  
て後唯翫秋風未到困  
前

今年へ例より異

腸先断是蟬悲の

不客の意も悲う

扇

盛夏にも消不雪終年

も盡く無風秋と

引て手裏に生十月と

藏して懐中に入

中勢  
元補

菅三品

白



秋

立秋 涼風

蕭颯之涼風と衰髮  
與誰か計會教一時

秋

鷄漸散する間秋色少

一鯉が常に趨處晩聲

微

早秋

但喜暑の三伏又随て  
去こと瓜知不秋の二

毛と送来ことと

槐花雨濕新秋の地

桐葉風涼して夜う

んと欲する天

あきふにまうらふ秋の風まれば  
かびくぬくさきもあはれとぞもよ

中野

秋 立秋

蕭颯涼風と衰髮 誰か計會の時

鷄漸散する間 秋色少

一鯉が常に 趨處晩聲

早秋

但喜暑の三伏又随て

去こと瓜知不秋の二  
毛と送来ことと  
槐花雨濕新秋の地  
桐葉風涼して夜う  
んと欲する天

炎景剝残て衣尚重晩  
涼潜と到て簟先知

七夕

憶得たり少年長乞巧

十の瓜竹竿頭上

願絲多

二星適逢て未別緒依

依之恨と叙困は五夜

將は明さんと團嬾

驚涼風颯颯の聲

露の別の泣うる應珠

空に落雲は是殘粧

の髻未成困

風は昨夜從聲彌悠露

明朝と及で涙禁せ

不

炎景剝残て衣尚重晩涼潜と到て簟先知

七夕

憶得たり少年長乞巧

七夕

十の瓜竹竿頭上願絲多

二星適逢て未別緒依依之恨と叙困は五夜

將は明さんと團嬾驚涼風颯颯の聲

露の別の泣うる應珠空に落雲は是殘粧の髻未成困

風は昨夜從聲彌悠露明朝と及で涙禁せ



去衣浪と曳て霞濕應  
行燭流と浸して月消  
と雖心へ片月と期  
て媒と為と欲す  
詞へ微波と託て且遣

秋興

林間酒と煖て紅葉  
と燒石上と詩と題  
て綠苔と拂  
楚思森茫として雲水  
冷商聲清脆として管  
大底四時心愁苦中就  
腸斷る是秋の天

物の色は自容の意と傷  
しつるに堪きり宜  
愁宇將て秋の心と作圖  
由来思と感ぜしむる  
秋の天に在多當  
時の節物と牽被たり  
第一心傷しむると何  
の處最なる竹風葉と  
鳴して月の明なる前  
蜀茶漸浮花味忘たり  
楚練新し雪擣聲と傳

秋晚

相思て夕に松臺の上と立  
ハ葦思蟬聲耳に滿る秋  
山望ハ幽月猶影と蔵  
砌と听飛泉轉聲と倍

去衣曳浪霞濕應  
行燭流と浸して月消  
と雖心へ片月と期  
て媒と為と欲す  
詞へ微波と託て且遣

去衣曳浪霞濕應  
行燭流と浸して月消  
と雖心へ片月と期  
て媒と為と欲す  
詞へ微波と託て且遣

去衣曳浪霞濕應  
行燭流と浸して月消  
と雖心へ片月と期  
て媒と為と欲す  
詞へ微波と託て且遣

秋興

林間酒と煖て紅葉  
と燒石上と詩と題  
て綠苔と拂  
楚思森茫として雲水  
冷商聲清脆として管  
大底四時心愁苦中就  
腸斷る是秋の天

物の色は自容の意と傷  
しつるに堪きり宜  
愁宇將て秋の心と作圖  
由来思と感ぜしむる  
秋の天に在多當  
時の節物と牽被たり  
第一心傷しむると何  
の處最なる竹風葉と  
鳴して月の明なる前  
蜀茶漸浮花味忘たり  
楚練新し雪擣聲と傳

物の色は自容の意と傷  
しつるに堪きり宜  
愁宇將て秋の心と作圖  
由来思と感ぜしむる  
秋の天に在多當  
時の節物と牽被たり  
第一心傷しむると何  
の處最なる竹風葉と  
鳴して月の明なる前  
蜀茶漸浮花味忘たり  
楚練新し雪擣聲と傳

物の色は自容の意と傷  
しつるに堪きり宜  
愁宇將て秋の心と作圖  
由来思と感ぜしむる  
秋の天に在多當  
時の節物と牽被たり  
第一心傷しむると何  
の處最なる竹風葉と  
鳴して月の明なる前  
蜀茶漸浮花味忘たり  
楚練新し雪擣聲と傳

物の色は自容の意と傷  
しつるに堪きり宜  
愁宇將て秋の心と作圖  
由来思と感ぜしむる  
秋の天に在多當  
時の節物と牽被たり  
第一心傷しむると何  
の處最なる竹風葉と  
鳴して月の明なる前  
蜀茶漸浮花味忘たり  
楚練新し雪擣聲と傳

ふりしつるに堪きり宜  
愁宇將て秋の心と作圖  
由来思と感ぜしむる  
秋の天に在多當  
時の節物と牽被たり  
第一心傷しむると何  
の處最なる竹風葉と  
鳴して月の明なる前  
蜀茶漸浮花味忘たり  
楚練新し雪擣聲と傳

秋晚

相思て夕に松臺の上と立  
ハ葦思蟬聲耳に滿る秋  
山望ハ幽月猶影と蔵  
砌と听飛泉轉聲と倍



秋夜

秋の夜長夜長しと眠  
こと無とバ天も明不  
耿耿と残燈壁に肖  
影蕭蕭たる暗雨窓と  
打聲  
遅遅たる鐘漏の初く  
長夜耿耿たる星河暗  
るんと欲する天  
燕子樓中霜月夜秋來  
只一人為長  
蔓草露深人定て後終  
宵雲盡ぬ月の明るる  
前  
黃蘗洲の裏孤舟の夢  
榆柳管の頭萬里の心

小づら山ぬもとの所なきの花すき  
不のりに又ゆ秋乃夕々々  
之

秋夜

秋の夜長夜長しと眠  
こと無とバ天も明不  
耿耿と残燈壁に肖  
影蕭蕭たる暗雨窓と  
打聲  
遅遅たる鐘漏の初く  
長夜耿耿たる星河暗  
るんと欲する天  
燕子樓中霜月夜秋來  
只一人為長  
蔓草露深人定て後終  
宵雲盡ぬ月の明るる  
前  
黃蘗洲の裏孤舟の夢  
榆柳管の頭萬里の心

野相公  
紀齊名

八月十五夜

秦甸之一千餘里凍凜  
一々水鋪漢家之三十  
六官澄澄して粉と錦  
錦と織機の中よ已に  
相思之字と辨衣と擣  
砧の上と俄と悉別之  
聲と添  
三五夜中此新月の色  
二千里外故人乃心  
嵩山表裏千重の雪洛  
水高低兩顆の珠  
十二廻の中此夕之  
好するは勝ハ無千万  
里の外各各吾家之光  
と争

足邊の山もれと更なるうささくしよ大ひらうかどりん  
ひいもまどほれうた明よりうづら秋のふじよま  
人丸  
新垣

八月十五夜

秦甸之千餘里凍凜  
一々水鋪漢家之三十  
六官澄澄して粉と錦  
錦と織機の中よ已に  
相思之字と辨衣と擣  
砧の上と俄と悉別之  
聲と添  
三五夜中此新月の色  
二千里外故人乃心  
嵩山表裏千重の雪洛  
水高低兩顆の珠  
十二廻の中此夕之  
好するは勝ハ無千万  
里の外各各吾家之光  
と争

公乘億  
同上  
白



碧浪金波三五の初秋  
風計會して空虚なる  
自疑荷葉ハ霜と疑  
し早うりりと人ハ道塵  
花雨と過て餘あつと  
岸白して還て迷松上  
の鶴潭融筭可藻中の  
魚  
瑤池ハ便是尋常の号  
も如不  
此夜の清明ハ玉  
金膏ハ一滴の秋風ハ  
露王匣ハ三更の冷漢ハ雲  
揚貴妃歸て唐帝の思  
李夫人云て漢皇ハ情

月  
誰の人ハ隴外久  
征戎も一と何の處ハ  
庭前より新に別離  
秋の水漲来て船の去  
こと速うり夜は雲收  
盡て月の行こと遅  
懸中醉不んハ争り去  
瓜得麻圍山の月正  
蒼蒼たり  
天山ハ辨不何の年此雪  
合浦にハ迷應舊日珠  
豊嶺の鐘は聲と和せ  
んと欲らりや否其華  
亭の鶴は警と奈何  
卿淚數行征戎の客掉

漢書中書王

十二年中書勝書久々好子美甲外

各皆中書勝書久々好子美甲外

碧浪金波三五の初秋風平會此夜思

自疑荷葉霜と疑人ハ道塵

花雨と過て餘あつと

岸白して還て迷松上の鶴潭融筭可藻中の魚

瑤池ハ便是尋常の号

も如不此夜の清明ハ玉

金膏ハ一滴の秋風ハ露王匣ハ三更の冷漢ハ雲

水の面にて秋月を瓜とく人水也  
今宵は秋は雲中かりり

月

誰の人ハ隴外久征戎も一と何の處ハ

庭前より新に別離秋の水漲来て船の去

こと速うり夜は雲收盡て月の行こと遅

懸中醉不んハ争り去瓜得麻圍山の月正

蒼蒼たり天山ハ辨不何の年此雪

合浦にハ迷應舊日珠豊嶺の鐘は聲と和せ

んと欲らりや否其華亭の鶴は警と奈何

紀納言

同下夕

同下夕

同下夕

同下夕

同下夕

同下夕

同下夕

同下夕

同下夕

同下夕

同下夕

同下夕

同下夕

同下夕



歌一曲釣魚の翁

九月九日

燕へ社日と知て巢と  
辭して去菊は重陽の  
為る雨と冒て開  
故事於漢武は採り  
赤雙官人之衣は挿り  
舊跡於魏文は尋れ  
亦黄花彭祖之術と助  
三邊は先其花と吹  
ハ曉の星は河漢は轉  
ぐらぐら如十分と引  
其彩と蕩せば秋の雪  
之浴川と廻ると疑  
俗本は秋の雲と有  
是へ誤り

王長は... 仲は  
あまは... 新  
よめは... 後中書王

九月九日 付菊

燕知社日秋景去菊の重陽田舎  
採故の於漢武赤雙採衣人衣  
尋跡於魏文亦黃公助彭祖之術  
先三邊先吹其花也曉星河漢  
引十分考菊之秋秋雲と白浴川

谷水花と洗て下流と  
而上壽と得たり者  
三十餘家地脈と味と  
和十日精と食而年顔  
と駐れる者五百箇歳  
菊

霜蓬の老鬢は三分白  
露菊は新花は一半黄  
是花の中は偏小菊と  
愛するは不此花開て  
後更は花無らんはう  
嵐陰暮さんと欲して  
松栢之後は凋くは  
契秋景早移て芝蘭之  
先敗くは朝  
酈縣の村間に皆屋間

昔は洗必汲流るは... 地脈和味准... 菊  
わがやどのきくは... 元補  
白  
元積

紀納言



陶家の兒子ハ垂堂不  
蘭苑ハ自俗骨為  
と瓜慙擗籬ハ長生  
有ハ瓜信ゼ不  
蘭蕙苑の嵐紫と推て  
後蓬萊洞の月比霜と  
照中

九月盡 わのれ  
縦晴画と以て固と為  
とも蕭瑟 雲欄と留  
難縦孟貴と而追令と  
も何爽籟 風境と速  
頭目ハ縦禪客の乞  
随とも秋と以て施與  
せんこと太難く多應

文峯 樹と按白駒の  
景詞海と舟と織す紅  
葉の聲

女郎花  
花の色ハ燕粟の如俗  
呼て女郎と為名と聞  
感ハ借老と契と欲れ  
ハ恐ハ衰翁の首の霜  
と似たるハ瓜惡

秋  
曉の露ハ鹿鳴て花始  
て發百般攀折一時の  
情

三善清行

鄰縣村園は在陶家兒子ハ垂堂

蘭苑自俗骨為籬ハ長生

有瓜信ゼ不蘭蕙苑の嵐紫と推て

後蓬萊洞の月比霜と照中

九月を

縦晴画と以て固と為とも蕭瑟

雲欄と留難縦孟貴と而追令とも

何爽籟 風境と速頭目ハ縦禪客の

乞随とも秋と以て施與せんこと太

難く多應

女郎花

花の色ハ燕粟の如俗呼て女郎と

為名と聞感ハ借老と契と欲れハ恐

ハ衰翁の首の霜と似たるハ瓜惡

秋

曉の露ハ鹿鳴て花始て發百般攀折







閑は汝が花の紅き  
人目と看ことと思  
正は是吾鬢の白ら  
人年一嘗と  
曾て種處元亮と思  
是非花の時世尊  
供ぜんが為う

紅葉

堪不紅葉青苔の地又  
是凉風暮雨の天  
黄纈纈は林寒して葉  
有碧瑠璃の水浄して  
塵無 或は風無も有  
洞中清淺たり瑠璃  
の水庭上は蕭疎たり  
錦繡の林

外物の獨醒たるハ松  
間は色餘波の合カハ  
錦江の聲

落葉

三秋而宮漏正長  
空階は雨滴万里而郷  
園何より在落葉窓深  
秋の庭は拂不藤杖  
又携る開は梧桐の黄  
葉と踏て行  
城柳宮槐漫は揺落す  
秋の悲は貴人の心  
到不

梧楸の影れ中は一  
之雨空灑鷓鴣の背

自は園舞ぬ侍供去樹去秋葉好

閑思看汝花は白ら年

常非種處思元亮為是花の時世尊

供ぜんが為う

紅葉

不堪紅葉青苔の地又

是凉風暮雨の天

黄纈纈は林寒して葉

有碧瑠璃の水浄して

塵無 或は風無も有

洞中清淺たり瑠璃

の水庭上は蕭疎たり

錦繡の林

外物の獨醒たるハ松

間は色餘波の合カハ

錦江の聲

落葉

三秋而宮漏正長

空階は雨滴万里而郷

園何より在落葉窓深



上數片之紅纒殘  
推蘇往返一杖朱買  
臣之衣之穿隱逸優進  
十履葛推仙之藥之踏  
嵐之隨落葉ハ蕭瑟と  
含之石之濺飛泉ハ雅  
琴と弄レ  
夜以逐て光多吳楚月  
朝毎ハ聲少漢林の風

鴈

十月の紅纒残

推蘇往返一杖朱買

臣之衣之穿隱逸優進

十履葛推仙之藥之踏

嵐之隨落葉ハ蕭瑟と

含之石之濺飛泉ハ雅

琴と弄レ

夜以逐て光多吳楚月

朝毎ハ聲少漢林の風

雁 竹編序

萬里人南去三春鴈

北之飛知不何の歳此

月之汝與同歸

得陽の江北色朝添滿

彭蠡の秋聲鴈と引來

四五朵山の雨之粧へる色

兩三行鴈此雲に點る秋

○異本 雲に點る聲と有り

虚弓避難未疑物上絃

之月の戀ハ掛掛奔箭前

迷易猶誤下流之水

順

高相如

順

後中書王

人九

也之

月

萬里人南去三春鴈

北之飛知不何の歳此

月之汝與同歸

得陽の江北色朝添滿

彭蠡の秋聲鴈と引來

四五朵山の雨之粧へる色

兩三行鴈此雲に點る秋

○異本 雲に點る聲と有り

虚弓避難未疑物上絃

之月の戀ハ掛掛奔箭前

迷易猶誤下流之水

菅二品

田達音

碧玉粧さすの斜

立る柱青苔此色紙

菅二品



数行の書

雲衣の范叔が鞆中の  
贈りの風措い瀟湘に  
浪の上れ舟

歸鴈

山腰の歸鴈ハ斜ニ帯  
と牽水面に新虹ハ未  
中と展未

虫

切切とふ暗窓の下  
唾たふ深草に裏秋天  
思婦の心雨夜人の  
耳 或ハ愁人の耳とらう

霜草枯むと欲虫思苦  
風枝未定困鳥の栖こ  
と難

床ハ短脚ニして蒼  
聲の閑と心幾壁ハ空  
心けて鼠孔と穿とと厭  
山館の雨ハ時鳴こと  
自か暗野亭此風の處  
織と猶寒  
最邊と悠遠して風の  
聞暗壁底は吟幽  
て月の色寒

鹿

蒼苔路滑して僧寺歸  
紅葉聲乾て鹿跡ハ在  
暗洋食身色遺變也遭

兼律中廣用詠集

雲衣范叔鞆中贈風措瀟湘浪の上

後中書三

秋風うらやましくねどきこゆまふ  
こがたまつさ瓜うけてきはらん

友則

降雁

山腰の歸鴈ハ斜ニ帯  
と牽水面に新虹ハ未  
中と展未

都有中

くらぐとくつ瓜又とてめくつ  
たきたけとたすくやかりくつ

伴勢

虫

切切とふ暗窓の下  
唾たふ深草に裏秋天  
思婦の心雨夜人の  
耳

白

霜草枯むと欲虫思苦  
風枝未定困鳥の栖こ  
と難

床ハ短脚ニして蒼  
聲の閑と心幾壁ハ空  
心けて鼠孔と穿とと厭  
山館の雨ハ時鳴こと  
自か暗野亭此風の處  
織と猶寒

白

蒼苔路滑して僧寺歸  
紅葉聲乾て鹿跡ハ在  
暗洋食身色遺變也遭

野相公

今んとこれのあきん秋のふわりとねつ牛馬のう  
きりくもいそぐ秋のあきねらひわまごまそれる

順

今んとこれのあきん秋のふわりとねつ牛馬のう  
きりくもいそぐ秋のあきねらひわまごまそれる

素性

森

蒼苔路滑して僧寺歸  
紅葉聲乾て鹿跡ハ在  
暗洋食身色遺變也遭

温庭筠

蒼苔路滑して僧寺歸  
紅葉聲乾て鹿跡ハ在  
暗洋食身色遺變也遭

紀納言



更草加る徳風は隨来

露  
憐可九月初三夜露

似珠は似月八月

露蘭葉は滴て寒玉白  
風松葉と衝て雅琴清

異本は街でとあり

霧

竹霧は曉籠嶺は街月  
蕪風暖は送江と過る

春 或は暗きもつり  
夕霧は人枕と埋こと  
と愁と錐猶朝雲の馬  
鞍より出て心愛す

よりちやとあつたにすいふとあつたや秋とあつらん 能 宣  
ちやとあつたにすいふとあつたや秋とあつらん 予 之

露

可九月初三夜露似珠月似月

露蘭葉は滴て寒玉白風松葉と衝て雅琴清

源英明

けりしとあつたにすいふとあつたや秋とあつらん

霧

竹霧は曉籠嶺は街月蕪風暖は送江と過る

夕霧は人枕と埋ことと愁と錐猶朝雲の馬鞍より出て心愛す

後江相公

擣衣

八月九月正長き夜千聲  
万聲了時無(興)止時と有

比斗星前は旅鴈と横  
南樓月下は寒衣は擣

擣處は曉閨月の冷  
いと愁裁將は秋塞雲

の寒し寄  
裁出ては還て長短の

製の迷ぬ邊愁定昔  
の腰圍は不

風の衣は香飛で双袖  
擣月の前は杵愁て兩

眉低て  
年年の別思は秋の鴈

は驚夜夜の幽聲は曉

とあつたにすいふとあつたや秋とあつらん 友 則  
ちやとあつたにすいふとあつたや秋とあつらん 深 衣 又

擣衣

八月九月正長き夜千聲万聲了時無(興)止時と有

比斗星前は旅鴈と横南樓月下は寒衣は擣擣處は曉閨月の冷

いと愁裁將は秋塞雲の寒し寄裁出ては還て長短の製の迷ぬ邊愁定昔

の腰圍は不風の衣は香飛で双袖擣月の前は杵愁て兩眉低て

年年の別思は秋の鴈は驚夜夜の幽聲は曉

は驚夜夜の幽聲は曉

土社八

後中書







看野馬無聽馬無  
臘裏の風光火迎被

此火の花の樹と鑽て

取うふ應對未終日春

の情有(再)對未終夜とらう

他時よへ縱鶯花の下

又醉も近日よハ那

獸炭の邊と離

霜

三秋の岸雪花初て白

一夜林霜葉盡紅

萬物ハ秋霜能色と壞

四時冬日最凋年より

聞寒して夢驚或ハ孤

婦之砧の上よ添山深

の邊と侵

君子夜深して聲聲不

老翁年晩て鬢相驚

聲聲已斷ぬ花亭ハ鶴

歩歩初て驚葛屐の人

晨よ瓦溝よ積て鴛色

と變十夜華表よ零て

鶴聲と吞

看野馬無聽馬無  
臘裏の風光火迎被

此火の花の樹と鑽て

取うふ應對未終日春

の情有(再)對未終夜とらう

他時よへ縱鶯花の下

又醉も近日よハ那

獸炭の邊と離

霜

三秋の岸雪花初て白

一夜林霜葉盡紅

萬物ハ秋霜能色と壞

四時冬日最凋年より

聞寒して夢驚或ハ孤

婦之砧の上よ添山深

の邊と侵

君子夜深して聲聲不

老翁年晩て鬢相驚

聲聲已斷ぬ花亭ハ鶴

歩歩初て驚葛屐の人

晨よ瓦溝よ積て鴛色

と變十夜華表よ零て

鶴聲と吞

菅三品

同

業平

輔耶

業平

同

白

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

雪

曉梁王之苑入ハ雪

群山よ滿て夜更公之

樓よ登まハ月千里に

明かり

雪

曉梁王之苑入ハ雪

群山よ滿て夜更公之

樓よ登まハ月千里に

明かり

雪

曉梁王之苑入ハ雪

群山よ滿て夜更公之

樓よ登まハ月千里に

明かり

雪

曉梁王之苑入ハ雪

群山よ滿て夜更公之

樓よ登まハ月千里に

明かり

雪

曉梁王之苑入ハ雪

看野馬無聽馬無  
臘裏の風光火迎被

此火の花の樹と鑽て

取うふ應對未終日春

の情有(再)對未終夜とらう

他時よへ縱鶯花の下

又醉も近日よハ那

獸炭の邊と離

霜

三秋の岸雪花初て白

一夜林霜葉盡紅

萬物ハ秋霜能色と壞

四時冬日最凋年より

聞寒して夢驚或ハ孤

婦之砧の上よ添山深

の邊と侵

君子夜深して聲聲不

老翁年晩て鬢相驚

聲聲已斷ぬ花亭ハ鶴

歩歩初て驚葛屐の人

晨よ瓦溝よ積て鴛色

と變十夜華表よ零て

鶴聲と吞

菅三品

同

業平

輔耶

業平

同

白

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

雪

曉梁王之苑入ハ雪

群山よ滿て夜更公之

樓よ登まハ月千里に

明かり

雪

曉梁王之苑入ハ雪

群山よ滿て夜更公之

樓よ登まハ月千里に

明かり

雪

曉梁王之苑入ハ雪

群山よ滿て夜更公之

樓よ登まハ月千里に

明かり

雪

曉梁王之苑入ハ雪

群山よ滿て夜更公之

樓よ登まハ月千里に

明かり

雪

曉梁王之苑入ハ雪

看野馬無聽馬無  
臘裏の風光火迎被

此火の花の樹と鑽て

取うふ應對未終日春

の情有(再)對未終夜とらう

他時よへ縱鶯花の下

又醉も近日よハ那

獸炭の邊と離

霜

三秋の岸雪花初て白

一夜林霜葉盡紅

萬物ハ秋霜能色と壞

四時冬日最凋年より

聞寒して夢驚或ハ孤

婦之砧の上よ添山深

の邊と侵

君子夜深して聲聲不

老翁年晩て鬢相驚

聲聲已斷ぬ花亭ハ鶴

歩歩初て驚葛屐の人

晨よ瓦溝よ積て鴛色

と變十夜華表よ零て

鶴聲と吞

菅三品

同

業平

輔耶

業平

同

白

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同



銀河沙漲三千界梅嶺  
花開一萬株

雪鵝毛似飛で散乱を  
人鶴髦と被立徘徊す  
或ハ風と逐て返不群  
鶴之毛が振が如亦晴

狐之腋と綴りと疑  
翅ハ群と得と似と  
浦と拙鶴心ハ興と余  
トて舟と掉さす人

應(異)心興と氣と應有  
庭上(詩)立れハ頭ハ鶴  
為坐して爐邊に在ハ  
手筆不  
班女が閨の中此秋の

扇の色楚王の臺上  
の夜此琴の聲

氷水面と封トて聞  
浪無雪林頭と點トて  
見ハ花有

霜鶴唳と妨て寒トて  
露無水狐疑と結で薄  
して氷有

春水

氷消水と見バ地花多  
雪霽山と望バ盡接ハ  
氷消て漢主霸と疑應  
雪盡て梁王枚と召不  
異牧被召不と有誤

銀河沙漲三千界梅嶺花開一萬株

雪似鵝毛飛散乱人披鶴髦被立徘徊

或ハ風と逐て返不群鶴之毛が振が如亦晴

狐之腋と綴りと疑翅ハ群と得と似と

浦と拙鶴心ハ興と余トて舟と掉さす人

應(異)心興と氣と應有庭上(詩)立れハ頭ハ鶴

為坐して爐邊に在ハ手筆不班女が閨の中此秋の

扇の色楚王の臺上の夜此琴の聲

氷水面と封トて聞浪無雪林頭と點トて見ハ花有

霜鶴唳と妨て寒トて露無水狐疑と結で薄して氷有

春水  
氷消水と見バ地花多  
雪霽山と望バ盡接ハ  
氷消て漢主霸と疑應  
雪盡て梁王枚と召不  
異牧被召不と有誤

氷消見ハ花有

氷消浪無雪林頭と點トて見ハ花有



胡塞の誰か能使節と  
全せん庫陀の還て  
恐臣の忠と失く瓜  
異忠臣と失く瓜恐と訓  
ず

霰  
摩牙米斂て聲聲脆  
龍領珠と投と顆顆寒

佛名  
香火一爐の燈一盞白  
頭と夜禮と佛名經  
香の禪心自火と用る  
く無花の合掌と開  
て春の因不

胡塞誰能令使節  
存地事恐失於忠

やま川のこぎはまこりの  
たのこりへのやとくらん

相規  
正

霰

摩牙米斂て聲聲脆  
龍領珠と投と顆顆寒

又やまたのあられと  
まきとらうけのいづきたま

形之

仏名

香火一爐の燈一盞白  
頭と夜禮と佛名經

香の禪心自火と用る  
く無花の合掌と開

皆丞相



あしきものいふことなきはたけのえ  
つよのこゝろはあやしくぬらん

萬盛

やうはちらにつらねるはまはるるし  
ぬるまゝの客もさきにきえなん

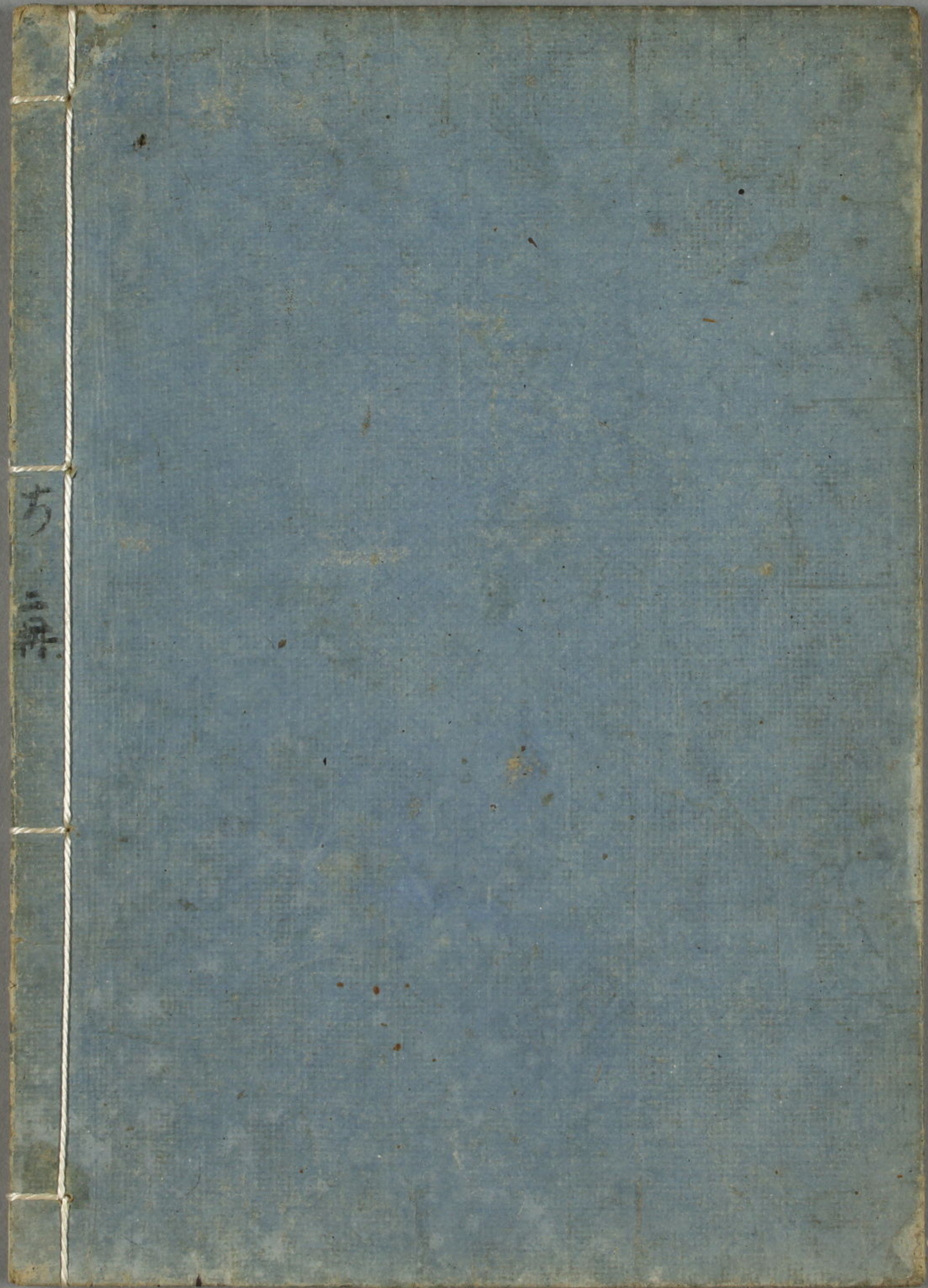
日

かぞふれをわが身につらるといふ  
さうらひのうらやまはげしき舞

舞之

和漢朗詠集卷之五





ち  
冊